
勝利ノ花ガ咲ク ~ピンポン~

天井 愛素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝利ノ花ガ咲ク くピンポンく

【Nコード】

N3392I

【作者名】

天井 愛素

【あらすじ】

運動オンチな中学生「橘 いろは」（たちはな いろは）。

いろはが入学した中学校は「南ヶ丘咲中学校」、

運動中心の学校である。

そのいろはが入部した卓球部では、青春だかなんだかよくわからないほんわかした日々が繰り返り広げられていた。

始め。(前書き)

青春のバカさが書かれています。
しゅるりとご覧下さい。

始め。

私は今年、中学生になった。

『南ヶ丘咲中学校』

そこが私の中学校。

この『南ヶ丘咲中学校』。

他の中学と同じ内容を勉強し、9教科すべてを勉強する。

違うところは、

「全寮制」と言う事と「運動・部活が中心」と言う事。

各地域の小学校から「スポーツがしたい!」「体育が好きだ!」と言った生徒が集まる中学校なのだ。

「運動を思うままにできる」

それこそが『南ヶ丘咲中学校』の売りである。

その売りが、私の大きな悩みなのだ。

私は体育・スポーツが大の嫌いで、一般的には『運動オンチ』と呼ばれる人種である。

かけっこはいつもビリ。マラソンもしかり。

だが、親の都合上、全寮制のこの中学しか入学する所が無かったのだ。

そんな私でもある部活に入らなければならぬ。

それがこの学校での掟。

私も部活に入った。

最初は色んなことかたや悩みが尽きなかったが、入ってみるとアラ不思議。

友達や先輩に支えられて、怒られて、笑って、バカな事して。

比率はバカ70%、スポーツ30%だったようにも思えるけど……。

そんな部活に私は入部した。

卓球部に。

始め。(後書き)

え、天井です！

自分が卓球部だったと言う記憶だけで成り立っている物語だったり
します(笑)

これから物語が始まって行くので、何卒よろしくおねがいます！
誤字脱字などがあつたり、小説初心者なもので、書き方などわから
ない事が多々ありますが、地球のような寛大な心で見てください。

登場する人物の紹介。(前書き)

青春のバカさが書かれています。

ごゆるりとしてご覧ください。

覚えにくい名前でごめんなさい。

登場する人物の紹介。

主人公

『橘 いろは』(たちばな いろは)

中学一年生。

女の子。

「元気」と「遠慮」だけがとりえの運動ダメダメ少女。

性格はあかるく、面倒な事になりたくないがために遠慮する事が上手くなった。

運動は何をやってもビリ&負ける。

日焼けた茶色でボブの髪型で、目がクリクリと大きい。

身長は標準的。血液型はO型。

戦型はドライブ。

『西音寺 茜』(さいおんじ あかね)

中学二年生。

女の子。

卓球部の部長で、生徒会の役員もしているエリート美少女。

クールでめっちゃめっちゃお偉いさん。

たまに見せる笑顔…もとい、「黒の笑み」「営業スマイル」で色々解決させる。

長い黒髪で左上に赤くて細いリボンアクセントとして付けている。

目はキリッとしている。

身長は標準よりやや大きい。血液型はA型。

戦型はツブ高のドライブ。

『高緒 真姫』（たかお まき）

中学一年生。
女の子。

いろはと同じクラスの学級委員長で優しい真面目少女。

親・兄弟の影響で小学校の頃から卓球をしている。

周りにとっても左右されやすい。勉強時は眼鏡を着用。

黒髪で前髪をセンター分けてピンで留め、下の方にツインテールで結っている。

タレ目を気にしている。

身長はいろはと同じ。血液型はA型。

戦型はドライブ。

『香波 紗々』（かなみ ささ）

中学二年生。

女の子。

おっとりしていてかわいい女の子。

「うん」「はい」「そうだね」の使い方が上手い（！？）

休日の寮では裁縫をしたり、皆のご飯を作ったりと家庭的。

栗色の髪を上の方でキュツとツインテールにしている。

背丈は小柄。血液型はB型。

戦型はカット。

『天野 瑠璃』（あまの るり）

中学一年生。

女の子。

ギャルで気が強い。かつたるい事は嫌いだが、スポーツはなんでもできる。

「は？」「ありえねー」「意味わかんない」をよく言う。
卓球部に入った理由が、「運動量が少なそうだから」。
キャラメル色の髪をサイドテールで一本にまとめている。
身長は少し高め。血液型はB型。
戦型はツブ高。

『桜 美子』（さくら みこ）
中学二年生。
女の子。

楽しい事をいつでも探し求めている少女。いつでも陽気。
「〜だぜ？」などと言う語尾を使う。少々行動が男っぽい。
こげ茶色の髪をお団子にしている。
身長は低い。血液型はAB型。
戦型はドライブ。

『来石 望花』（きたいし もか）
中学一年生。
女の子。

無口で謎の多いミステリアスな少女。
必要最低限の事以外は語らない。物知り。
淡い黄緑色のショートヘアの髪型。
身長は標準的。血液型はAB型。
戦型はドライブ。左利き。

『主野 利絵』（おもの りえ）
中学二年生。
女の子。

副部長でやる事はやる人。

すごい気分屋で、自分の興味がない事には絶対にテンションを上げないが、それ以外は機嫌がいい。

淡い紺色でゆるくカーブがかかっているお嬢様風の髪型。

身長は高い。血液型はO型。

戦型は状況に合わせてドライブ&カット。

『海山 敬像』（うみやま けいぞう）

中年のオジサン。

男性。

卓球部の顧問・コーチ。

普通の学校生活では美術の先生をしているので、忙しいために、大会の一週間前にならないと部活に来ない。

感覚が人よりズレている。

黒い短髪で丸めがねをかけている。

身長は標準的で、細身。血液型はAB型。

戦型はカット。（現役時代）

登場する人物の紹介（後書き）

どうも。天井です！

今回は登場人物でした…。漢字辞書を引っ張り出して来ました。覚えにくくてごめんなさい！

女の子がだいたいと言つか、九割を占めています。

あれ？コレって誰だっけ？

と思ったら、このページを開いていただけるような、辞書のようなページです。

次回から、ストーリーの方に入っていきます（笑）

黒板。(前書き)

青春のバカさが書かれています。

キャラの名前がややこしいかもしれません。

ごゆるりと、お茶でも飲みながら見てください。

黒板。

某所、県立病院。

私「橘 いろは」(たちはな いろは)は病院に来ていた。

兄が3年前にバスケの試合で倒れた。

最初は骨折か何かだと病院側も私達もそう思ったが、何日も寝っぱなしでおかしいと思い検査したら「心臓の病」を患っていたのだ。

「なあ、いろは。お前今日って入学式だろ？俺は大丈夫だから行け
って」

兄は平気だと言ったようにへらつと笑ってそう言った。

「いいよ、お兄ちゃん。どうせ入学式は昼からなんだし」

「いろはがああスポーツで有名な『南ヶ丘咲中学校』に入るとは思
わなかったなあ……」

「寮生活できる中学校なんて、この地域でそこしかないでしょ？」

兄の入院費を稼ぐために両親は一日中働いている。

そのため、私の面倒を見てくれる人が居ないので
寮生活の『南ヶ丘咲中学校』に入った。

「で、何部に入るつもりなんだ？バスケかあ？」

「んな訳ないじゃん。運動苦手だし……」

そう。

それが今の悩み。

スポーツで有名な中学校だが、生憎。私は世間で言う運動オンチ…。

きっとクラスでも学校でもうく。

退学になんてなった日には、どうしたものか。

「そんなしかめっ面すんなよ、いろは。俺が見る限りではよぉ、お前運動できると思うぜ？やらないだけであって」

「ははは、そうかもねー」

ふっと兄は時計に目をやった。

「色々準備とかもあるんだろ？そろそろ行った方が…」

「わかった。じゃあね、また来るから」

「おう。もう来んな」

その憎まれ口にドアを閉めるという行動で答えた。

南ヶ丘咲中学校。

校舎はそんなにボロくなく、どちらかと言うと新しいほうだ。運動専門の学校と言う事もあり、体育館が三個、武道場と呼ばれる建物が二個もある。

もちろん、部活に文芸部はない。すべて運動部だ。

慣れない制服に身を包み、一番大きな体育館で入学式は行われた。生徒人数は大体百二十人と言ったところだろうか？

本当に数えた訳でも、戦国時代の忍者でもない私の目測で、そのくらいと言うところだ。

パイプイスに座って校長先生の話の方耳で聞いて受け流し、私はキョロキョロと辺りを見回した。

男子は大体がスポーツ刈り、短髪。まれに茶髪のちゃらつとした子が見受けられると言った程度。

よく見ると皆、ガチツとした体つきで、完全なるスポーツ体型の筋肉質だ。

女子はと言うと、やはりショートの子が多いようだ。だが、4人に一人は長い髪をキリツと結っている。

なんとも「スポーツ命です！」と言ったようなもんだ。

キョロキョロ辺りを見回したら、いつの間にか入学式は終わって、教室で先生の話聞いていた。

すごい長い話だったが、要約するところ言う事。

この学校は「部活」という団体をグループとカウントし、すべての行動をその部活の仲間で補い、協力してもらう。

具体的には、寮を部活の部員で生活したり、文化祭・体育祭なども部活で出し物や体力を競ってもらおうと言う事をしてもらう。

それが学校の掟。

一年生は放課後までに何の部活に入るか「入部届」を校長室に提出しなければならぬ。

クラスの話は先生の話が終わると同時に入部届を提出していたが、私は迷っていた。

頬杖を付いて窓の外の少しオレンジ色になった空を眺めて考えた。

「あの、最後の方、電気お願いしますね」

ツインテールの真面目そうで可愛い女の子がそう告げて教室を出て行った。

その三分後に、

「あゝ、かったりいな」

ギャルっぽい女の子がそうはき捨てて教室を出た。その五分後に、

「……………電気、消すから」

無口そうな女の子が本を片手に教室を出た。

はあ……………。

あ？

教室を見渡すと誰も居なかった。

ボーっとしているうちに置いてかれた。

しまった！と思い、スクールバックを持って小走りで教室を出た。

だが、部活を決めない事には今日の寝床も食料もない。

これは困った。

一応、部活の予定が書かれている黒板の前で部活を決める事にした。

今日の予定

「あります」「グラウンド十週した人から練習」「各自、自主練習」

「あるよ」

など、さまざまな文字・色のチョークで書かれていた。

だが、一つ書いていない部活があった。

卓球部だ。

卓球部は運動量も少なそうだし、目立たないし、運動オンチでも歓迎してくれそうだし、と思い、選択肢の中には入っている部活だ。

まあ、正直言うと、入りたい。

そう思っていると、向こうから誰かが歩いて来た。

「あ、新入生？」

声をかけられた。

容姿端麗、女の人だ。先輩であろう。スラッと伸びたキレイな足に、黒い長髪。左耳の近くには可愛らしいピンクのリボンがされていた。

「は、はい！」

と強張った肩で答えた。緊張していたのだ。

「そ。何部に入るの？」

「いえ、そのー…き、決まっていなくて…」

すると、先輩はニヤリと笑ってこう言った。

「卓球部、入りなさい」

強制？

先輩は立て続けにこう言う。

「入るところがないなら、卓球部に来なさい」

入りたいと思っていた部活の勧誘。

不意を突かれて目まいがするかと思っただが、ブルッと首を振って慎

重に訊いた。

「ど、どうして…ですか？」

そしたら先輩は急に目をうるつとさせて、手を可愛らしく組み、こ
う言った。

「実はね…あと一人入ってくれないと、廃部になってしまうの。卓
球部を助けると思っ…ね？お願い！」

先輩は可愛かった。
すんごい可愛かった。

つて、そんな事思ってる場合じゃない。

チャンスじゃないか！自分を必要としてくれる部活がある。それだ
けで万歳だ！
待てよ。

こんな自分がそんなピンチな部活に入っているのか？
お荷物になつて捨てようとしても捨てられない、もどかしい存在で
もいいのか？
だが。

ここで入っておかないと、寝床もない。食事も。
恥じより、衣食住の方が優先だ！

「あの…私…卓球部に入ります！」

私は大声でそう宣言した。

廊下中に「ります」「ます」「…す」と響き渡る。

先輩はさっきと同じニヤリとした表情した。

「よろしくね、えっと…たち…」

「橘いろは（たちばな いろは）です！」

「いろはか、私は西音寺さいおんじ 茜あかねでいいわ」

私はぱつとした表情を見せて、すぐに迷っていた時の暗い顔に戻した。

嫌な事を思い出したのだ。

「先輩、私…運動オンチですよ？」

先輩は黒板に書き終わった居場所のないチョークを床に落とした。

黒板にはキレイな文字で『新入生歓迎会！』と書いてあった。

黒板。(後書き)

どうも、天井です！

本当に書いてて自分はくだらないストーリーを考えるもんだ…と思います。

この前、スタジオジブリさんの作品「もののけ姫」を観ました！

あんな壮大でファンタジーなラブストーリーが描けるなんて感激しちゃいますよね！！

いつかあんな風にすごい物語を書けたらなあと思います。(何千年かかるかな?)

それでは。

入部。(前書き)

青春のバカさが書かれています。

キャラがいっぱい出てくる上、名前がややこしいです。

お菓子でもつつきながら、こゆるりと読んでください。

入部。

「運動…オンチ？」

先輩はチヨークの粉は付いた手をプルプルさせていた。

「はい…。やっぱり私なんてお荷物ですよ…。すみません、辞め
さ」

「貴女、^{あや}亜矢先輩って知ってる？」

「へ？いや…わかりません」

「そ、そう。いいのよ、こっちの問題だから！ごめんなさい！取り
乱しちゃって…」

さっきのどこが取り乱したと言うのか。

皆目見当がつかないが、取り乱していたらしい。

亜矢先輩？

どこの記憶を探してもやっぱりない。

私のお兄ちゃんの名前は神^{しん}弥^やだし。

亜矢先輩の事は気になるが、訊いたら取り乱してしまつと思ひ、訊
かない事にしておこつ。

先輩は続いてこう言った。

「運動オンチ大歓迎よ、安心して来なさい」

「…先輩、運動オンチの意味知ってますよね？」

「いろは、そんな事も知らなくて人間生きて行けないわ」

生きていきますよ、先輩。

と、心の中でツッコんだ。

茜先輩はチョークを拾って黒板の淵に戻すと、私の入部届をキレイな字で書いてくれた。

それを持って校長室に届けて、荷物と、部屋番号の書かれた紙と、部屋の鍵を交換してもらった。

茜先輩はそこまで付いて来てくれた。

優しい先輩だ。

少し前に気付いたのだが、茜先輩のネームプレートの横には『生徒会』のバッチが付いていた。

生徒会の役員らしい。

「それじゃ、自力で寮を探しなさい」

そうして茜先輩は、黒くて長い美しい髪を揺らして、可憐に去っていった。

それをポーッと眺めてから、外に出て寮を探した。

外はオレンジと藍色が美しいグラデーションをかけて、一番星が薄っすらと見えていた。

ふう。

一件落着だー…なんて思っではいけなかった。

卓球部の寮をやっとこさ二十分探しまくって、ようやく見つけた。その名も『ひなげし寮』。

何故部活の名前を使わないのだと思いつつ、寮内へ入った。

外装は、そこらへんの寮やマンションやアパートを想像していただければ問題はない。

この寮は、二階が部員各自の部屋になっていて、一回に風呂や台所やミーティングルームなど…共用の部屋がたくさんあった。

まずは階段を見つけて二階へ行った。

『二〇五号室』

そこが私の部屋だった。

すぐく殺風景で、ベットと勉強机、ライト、電気、タンス、押し入れがある程度。

そこに荷物をどさっと置くと、他に人が居ないか探しに行く事にした。

まずは隣の部屋から。

二〇四号室はお留守だったので、二〇六号室のインターフォンを押した。

ピンポン………卓球か!!

ふざけた漫才を心の中で繰り返していると、ドアが開いた。

「はあい?どちら様でしょうか?」

可愛らしい声と共に、メガネをかけた黒髪でツインテールの大人しそうな子が出てきた。

「あ、隣の部屋の橘いろはって言います」

「あ！近所挨拶しなきゃでしたね！すみません！」

強制ではないと思うんだけどね…。個人でやってる事ですし、なんかすいません。

「私は高緒^{たかお} 真姫^{まき}。いろはさんと同じクラスの」

え？同じクラス？

つて言おうと思ったけど、それだとなんか自分は人の話聞いてない人みたいな感じがしたので言わない事にしておく。
いや、そもそも人の話聞いてないんだけどね。基本的に。

「ああ、『いろはさん』なんて『さん』付けなくていいよ」

「え、あ、うん。そういえばね…」

真姫が話しをしようとした時に、二〇七号室からケータイ電話を持ったギャルっぽい女の子が出てきた。

「ちょっと、真姫？あのさ…って、それ誰？」

それ！？

ちよ、こつちが知りたい…

「あ、いろはさ…いろは。この子は天野^{あまの} 瑠璃^{るじ}って言う子。同じクラスだよ。そして卓球部の新入生」

真姫が丁寧に瑠璃の事を説明してくれた。

「瑠璃、こちらは橘いろは。同じクラスで…」

「ふーん、いろはね。よろ〜」

「よ、よろしく…」

なんか、すごい子が同じ部活だな…とか思いつつ。
瑠璃はこう告げた。

「あのさ〜、二〇八号室の来石^{きたいし} 望花^{もか}って子が居るんだけど、どこに居るか知らない？」

「どうして？」

「いやあ、今日って七時からマクナルで新入生歓迎会らしいんだけど、そろそろ行かなきゃなんだよね。新入生はアタシら四人だけだからさ、一応探しておかねーと」

初耳です、その子も、歓迎会の場所も。

でも、望花…だっけ？どんな子かもわからないし、まだ校舎に居るかもしれない。

まずはどんな子が訊いておくべきだろう。

「瑠璃、その子ってどんな子？」

「どんな子って言われてもな…。淡い黄緑色した髪の色で髪型はショートだな、まだ制服着てると思うけど。背丈はいろはくらいだよ」

「ありがとう！じゃ、探すね！」

回れ右を勢い良くして一歩踏み出した瞬間、上手く着地でできずに態勢を崩してどたつと転んでしまった。
二人とも、え？と驚いた表情をして固まったので、まずい！と思い、作り笑いをして

「あはははは〜…。ちょっと引力が強かった〜」

と言って走った。

「引力……だと？」

と言った二人の視線が痛かったが。

…！！

居た。

入部。(後書き)

どうも、天井です！

今回はちょっと長いですね…気分屋で本当にごめんなさい。

自分で見てておかしい表現だな…ってところは多々ありますが、そこは本当にあの、アレです(笑) なんだよ…

歓迎。(前書き)

青春のバカさが書かれています。

キャラがややこしいです。

一話分だと思ってたらいつの間にか三話くらいになってました。
ご飯でも食べながら、ごゆるりと読んでください。

歓迎。

資料室。

そこはあらゆる本が揃う場所、情報が行き交う場所。

そこに、淡い黄緑色したショートタイプの髪型で制服を着てる女の子が居たのだ。

ここからが衝撃的。

その子は高い本棚の上にあぐらをかいて座り、「お釈迦様は実在するの？！」と書かれたタイトルの本を片手に、ブツブツと念仏をか細い声で唱えていた。

「あのおゝ…来石さん？」

「…」

「望花ちゃん？」

「…」

「望花ツ？」

「ん」

やっとこっちを見た。

顔がすごい大仏みたいにのめーっとしてたが、一瞬でクリクリした可愛い大きな目に戻った。

「…仏の事に興味があるの？」

「ないわけではない」

「そう、なんだ。念仏とか…すごいね」

「そんなにすごい事でもない。…私に何の用？」

すっかり用を忘れてた。ありがとう、望花。

「そうそう！今から新入生歓迎会があるんだって！だから、呼びに来たの」

すると望花は本棚からひょいと飛び降りて、見事に着地した。

「…行く」

学校から一番近いマクナルに卓球部員全員と顧問の海山うみやま 敬像けいぞう 先生が集まった。
部員は二年生が四人、一年生が四人の八人だ。部員は全員女子である。

「先生！お〜ご〜り〜」

と二年生の小柄な先輩が勢い良く言った。

「ダメだ、俺は一年の分しか持たん。お前ら二年は自腹だぞ」

先生は冷たくあしらった。

茜先輩はみんなからどんなハンバーガーが食べたいか訊いて、その分のお金を貰い、一人で注文に行った。ハンバーガーが来るまでは少々時間がかかるらしい。その間に、自己紹介をする事になった。

「二年一組、卓球部部長の西音寺 茜。よろしく」

やっぱり、茜先輩はかっこいい。

すると、机の上にはハンバーガーとポテト、ジュースが揃った。次に紺色の髪でクールな先輩が自己紹介した。

「二年一組、主野おせの 利絵りえ」

「利絵は副部长よ」

茜先輩がすかさずフォローした。が、利絵先輩はそんなことどうでもいいと言ったようにポテトを食べていた。

次に「はいはい！次！」と元気の良い先輩が自己紹介した。

「二年四組の桜うぐい 美子みこだぜ〜！よろしく〜！」

美子先輩はそう言ってすぐにてりやきバーガーに喰らいついた。最後に控えめそうな笑顔の可愛い先輩が自己紹介した。

「あつ…香波 紗々ささ（かなみ ささ）です。よろしくね」

紗々先輩はニコツとして一年生に話題を振った。

「高緒 真姫です。お役に立てるかはわかりませんが、精一杯がんば

「ばります！」

真姫が挨拶をすると、拍手が巻き起こった。
真姫は照れながら、瑠璃に話を振った。

「天野 瑠璃、一年五組、よろしくっス」

ケータイをいじりながら、やる気なく挨拶をした瑠璃。
すると、間髪入れずに望花が挨拶した。

「来石 望花。よろしく」

必要最低限の挨拶をして、望花は私を見た。

「え、え、え、えーっと！橘 いろはです！よ、よろしくお願ひします！！」

文章は長いが、話した内容は望花と一緒にだった事に少し落胆した。
茜先輩は顧問の海山先生に話しを振った。

「卓球部顧問の海山 敬像だ。担当教科は美術、みんなと一緒に部活に専念したいところだが、なんとも忙しくてな、時々しか顔をだせないんだ。今日はただのオジサンだから、みんな仲を深めるようにな！」

『はい』

そこからは、大会でどこまで行くとか、恋の話とか、勉強の事とか、

色々先輩から聞いた。
みんなが大体ハンバーガーを食べ終わったところに、先生から連絡が入った。

「そうそう。明日、お前ら一年生と俺が試合して、俺から一本でも取れなかったら部活辞めてもらうから」

『は??』

いやいやいやいや！先生！

ちよ、待って！待って！タンマ！タンマ！

私、運動できないよ？

卓球つつたつて、ラケットも握った事ないんだよ？

それに、どんな生徒でも部活入んなきゃ退学だよ？

と言うか、私が不合格で部活辞めちゃったら、廃部になっちゃうよ？！

「え？誰からそんな事きいたの？」

と、紗々先輩が尋ねてきた。

「え…茜先輩！言いましたよね!？」

茜先輩はニヤつと笑った。

すると、美子先輩が爆笑しだした。

「あっはっは！いろは！それは！それ、茜に騙されてるぜ?？部員は最低でも二人居れば成り立つんだよ。いろはが居ないとできない事は団体戦を組む事。団体戦は八人居ないと組めないからな!？あっはっは!？」

私は無言で茜先輩に抵抗したが、茜先輩はニコニコしていた。それを気にせず先生はこう言った。

「じゃ、これで解散するが、各自！俺からポイント取れるように作戦立てとけよー。ラケットは倉庫に新しいの入れといたから、選んどくよーに。自分のラケット持つてる奴は自分の使えよ、じゃーな！」

先生はそう言って店を出た。

外は暗かった。私達八人も固まって行動しようと言う事になり、一緒に帰った。

寮の一階を『自称、てきとつたいおっ適当大王利絵先輩』に案内してもらった。

風呂場、台所、ミーティングルーム、トイレ、資料室、練習所、テレビ室、休憩室など……。そして最後に『倉庫室』へ行った。

倉庫室は暗くて静かだ……。今にも何かできそうな感じがした。

利絵先輩はそこから新しいラケットの入った籠を出して来て、

「さあ、諸君。選びたまえよ」

と、テンション低く言った。

真姫と望花は自分のラケットを持っているらしく、私と瑠璃が選ぶ事になった。

「ねえ、瑠璃。ラケットを選ぶ基準とかがってあるのかな？」

「適当じゃね？」

「適當って…それはさすがに。なんか黒いツブツブした奴とか、普

通にどっちもツルツルの奴とかあるし…」

「何この赤いツブツブ。でかいし！ははは！」

「そこ、笑うとこなんだ！？」

すると利絵先輩が「盛り上がってるところ悪いんだけど…」と口をはさんできた。

「今、いろはが持っているラケットはシェイクって言って、握手するように持つ。最近はその主流ね。そして一番奥にあるのがペンタイプ。ペンを持つように持つわ、温泉卓球なんかするときはこんな感じのラケットね。使いやすい人はコレ使うわ。瑠璃が持っている黒いツブツブのラバーはツブ高って言うの、『魔法のラバー』ってても言われてて、コレを使う事によって回転が変わってしまうのよ」

（ラバーとは、ボールを当て打つ部分にある赤と黒のゴム・スポンジでできた部分のこと）

と、そこまで説明すると瑠璃が目をキラキラさせて叫んだ。

「アタシ、コレにするー！！」

「瑠璃のはシェイクのツブ高ね。茜と同じタイプのラケットよ」

「瑠璃、なんでそれにするの？」

「運命的なものを感じたからー！！」

それでいいのか…。

本当適当だな、この人。

と思ったところで、私もあるラケットを手にしてこよう言った。

「私も…コレがいいなあ…」

「いろはのラケットは表ソフトラバー…ツルツルのラバー、シェイクね」

「いろは、センスわる〜」

「うるせえやい！コレが一番シンプルでいいじゃん！」

各自、ラケットが決まったところで部屋に戻る事にした。

ベッドに寝転がってラケットを眺めた。

握る部分は灰色と紺色でピンク色の線が入ってて可愛い…と言う理由で選んだと言うのもあったが、なんだかこのラケットなら…

勝てそうな気がしたのだ。

歓迎。(後書き)

どうも、天井です！最近肩こりがひどくて仕方ないです。

バイト先から走って家に帰ったんですが、足が痛くなる前に方がこりました。

自転車が使えないって不便ですよ。

…次の戦ってるシーンってどう書けばいいのかよくわかりませんが、あたたかい目で見守ってください) 、 、 (

構想。(前書き)

青春のバカさがゆるく書かれています。

わからない表現はできるだけ補足していきたいと思えます。

卓球のわかる人から初心者の方まで、お茶でも飲みながらゆっくりしていただください。

構想。

中学校の授業は難しい。

でも、授業中はぼーっとできるからそれはそれでいい。

真姫は黒板に数学の解答をすらすらと書いてる。

瑠璃はいつ見つかるか知れないが、ケータイをいじっている。

望花は「空色のチーズ」と言うなんとも言えない本を読んでいる。

私は、先生に勝つ方法をずっと考えている。

でも卓球の事なんてさっぱり分かんないし、「先生の戦型はカットだ」と茜先輩に教えられたが、なんのこっちゃさっぱり分かんない。第一、ラケットの握り方も知らないのだ。勝てなんて無茶な話である。

「いろは、何ぼーっとしてんの？」

瑠璃が私の横に立っていた。

「あれ？授業は？」

「何ねぼけてんの？さっき終わったじゃん。もう昼だし、早く食堂行こー！」

そう言ったとたんに真姫が「おい」と呼んだので、私は席を立った。

食堂。

私はハンバーグ、瑠璃はサンドウィッチ、真姫はおにぎりセット、望花はオムライスを食べていた。
四人で色んな話をした。

「真姫って、勉強してる時メガネかけてるけど、コンタクトとかにしないの？」

「私、小さい文字が見えなくて。でも別に生活に支障はないから普段はメガネかけないよ。だからコンタクトもいらないの」

「そうなんだー」

と言う質問をしたり。

「瑠璃ってなんで卓球部に入ったの？」

「は？運動量が少なそうだからに決まってんじゃーん。あ、メール来た」

自分と言葉は違うが、入部した理由が同類なのでちょっと焦る。
と思ってみたり。

「望花はミステリアスだよね」

「なぜ？」

「だって、口数も少ないし、何考えてるかわかんないんだもん」

そこから私、瑠璃、真姫で望花が何を考えるか当てると言うゲームをした。

「わかった!」と瑠璃が叫ぶ。

「望花は今、好きな人の事考えてる!」

「…ちがう」

次に私も言ってみる。

「んじゃ、卓球のこと!」

「…ちがう」

最後に真姫が言う。

「うーん…さつき呼んでた本の事かなあ?」

「…ちがう。なぜ、このオムライスにはケチャップがついていないのだろうかと考えていた」

『解るかッ!』

三人のツツコミが一番さえたような気がした。

五時間目も清掃もHRもあつという間に過ぎてしまった。何も考えないまま、部活へ直行。すると先生がジャージ姿で待っていた。もちろん、先輩も。私達もジャージに着替えて、ラケットを持って集合した。

「さあ、準備はできただろう。誰でも来い！」

しーん。

先生の意気込みも空しく、辺りは沈黙につつまれた。

先生は少し考え込むと、真姫を指した。

「高尾 真姫。お前からかかって来い」

真姫は少し動揺しながらも、台についた。

「おねがいます」と挨拶を交わし、先生が鋭いサーブを出してきた。

先輩方も驚いたらしい。

「一年相手に本気!？」

「先生、大人気ないぜー!こんなか弱い…」

美子先輩がそう言いかけたとたん、真姫の何かが変わった。

真姫はラケットを下ろすと、思いつきり早いスピードでラケットを上振り上げてボールを擦り上げた。

(ドライブの事です)

また先輩方はそれにも驚いていた。

「ループドライブ!？」

私にはなんのこっちゃさっぱりなので、茜先輩に訊いた。

「先輩、ループドライブってなんですか？」

「山なりに近い軌道を描き、ものすごい回転をボールに与える打法の事よ」

「真姫、計算高い子と見た」

利絵先輩が呟く。

真姫が打ったボールの回転はすごく、先生はとることができなかった。

「さすが、小学生でベストエイトまで行っただけはあるな」

先生は真姫にそう言った。

「ベストエイト!?!」

黙っちゃいない、他のメンバー。

真姫は照れくさそうに返事をした。

「私、小さい頃から卓球してたの。でも、県のベストエイトだからそんなにすごい事でもないんだけど…」

十分すごいだろ…と心の中でツッコんだのは私だけではないはず。

「次…来石 望花!」

先生の指名と同時に台の方へと歩きだし、「おねがいます」と挨拶をしてゲーム開始となった。

一球目は先生のドライブが見事に決まり失点。

次の球、先生のサーブを望花は真姫の動きと同じ動きでボールを打った。

「カーブドライブ…決まったわね」

紗々先輩はニコっとしてそう言った。

望花の放ったカーブドライブとやらは見事に決まった。やっぱり業界用語らしいが全然わかんないので訊いた。

「真姫ちゃんと同じフォームで出すんだけど、ボールの擦る位置で微妙に違うの。右利きの人なら取りやすい回転だけど、望花ちゃんの場合は左利き。先生も左回転のボールなんて滅多に來なかつたでしょうから、たじたじね」

紗々先輩はいつも笑顔だ。何故だろう。

と言うか、なんでみんなそんなに卓球うまいの!?

「望花、まさかベストエイトだったなんて言わないよね!？」

「まさか」

望花は私にボソッとそう言うと、真姫に

「真似させてもらった」

とあやまった、っぽい。

「次、天野 瑠璃！お前だ」

先生は瑠璃を指名した。瑠璃は「かつたりーな」とか言いつつ、台

についた。

「おねがいます」の挨拶をすると、先生は今までよりも鋭く低いサーブを出した。

やはり、中学生にポンポン点数を入れられたんじゃ、先生も気分は悪いだろう。

だが、それを裏返したかのように瑠璃はネットギリギリに小さく返した。

ボールは2バウンドしたため、瑠璃はあっさり勝利した。

またまた、黙っちゃいない先輩方。

「瑠璃、やるわね」

今度は利絵先輩だ。

「ストップだなんて、ヘタすればチャンスボールにもなりかねないのに」

利絵先輩はニヤッと笑った。

私は帰ってきた瑠璃に感想を聞いてみる。

「瑠璃すごい！どうやったの！？」

「え？ただ力抜いただけ」

利絵先輩。コイツがそんなすごい技、できるわけないです。

「最後、橘 いろは！」

「は、はいいいー！」

いきなり呼ばれたんでびつくりした…。

この先生声が大きいんだよ…。

「応台について「おねがいます」と挨拶をした方がいいが、ラケットの握り方もわかんないし、打ち方もわかんないし、どうしたらいいんだろー？」

なんて思ってるうちに先生はサーブを出してきた。

「無回転!？」

「先生、サーブを変えたわ!」

先輩がそう言ってるけど、何かおかしなサーブが来る事以外はわからない。

きっと卓球部も入れなくて退学…なんだろうな。

ええい!こうなりやヤケだ!!

私はラケットをブンツと振って、思いっきりボールを斜め上から叩いた。

ああ、終わった。と目を閉じた瞬間に、コツンとボールが台に入る音がして、とっさに目を開けた。

入った…。

「一往復もせずに…スマッシュを決めた!？」

「亜矢先輩の再来…」

美子先輩が驚く中、茜先輩はそう呟いた。

「あーあ、完敗だよー！全員合格。これから頑張れよー」
先生は手をひらひらと振って職員室に帰ってしまった。

合…格？

構想。(後書き)

どうも、天井です！

まさかのベタな展開でサーセン(笑)

スポコンは漫画で見ると迫力がありますよね！

小説は迫力にアレだな…とかおもいつつ。

それでわゝ

合格 (前書き)

青春のバカさが書かれています。

たまにはジューズでも飲みながら、ごゆるりと読んでいただければ幸いです。

合格。

「ハア…ハア…ハア…」

「息づかい自重しやがれええ!!」

四時間目、マラソン。

「だあ、だつてさ、ハツ、瑠璃。マラソンで、こんなハツ!に、辛かったつ…げっほごっほ!!」

「まだね、二周目じゃん。あと八周あるんだけど。あと、辛いなら無理してしゃべんな」

「ハア…ハア…ハア…」

「お前そればかりかああああ!?!アタシが悪かった、しゃべってくれ!ただでさえコレ初見さんは引くつてのに!」

「だつて、持病のぜん息が…がはっごほっ!」

「嘘つけ!いろは健康観察の時、バリバリ元気だったろ!?!」

「あはッ…ハッ…ばれたあ…」

バタッ。

「いろはあああああ!?!?!?!」

私はグラウンドに倒れた。
灼熱の太陽、その温度を受けジリジリと熱る砂ほての中、仲間の叫び声にも反応できずに。
み…水を…水をください…。

「きつと、軽い疲労と寝不足ね。じきに目覚めるわ」

保健の先生声？

って事はココ、保健室？

「目覚めた」

「いろは大丈夫？心配したんだよ？」

「たあく、心配させやがって、二周目で倒れるとかありえねーつつの」

目を開けるといつもの三人が立っていた。

だが、次の瞬間！

ものすごい睡魔に襲われたため…まぶたが重く…

「寝かせねえよっ！」

瑠璃が思いつきり私のほっぺたをつねり上げた。
つねり上げるって…うん、痛いよね。

「いふあああああ！…！キフ！キフ！」

「あ、つねられて濁点の発音が出来ないのね…」

「寄付？」

望花が話しを脱線させようとしたため、会話は削除されました。

「それはともかく…」と真姫が続ける。

「どうして倒れたの？そんなに疲れてた？」

実は昨日。

合格って言われたのがすごく嬉しくてずっと素振りしたり、勝因を思い出していたり、卓球の本を資料室から持ってきて読みふけていた…って、遠足を心待ちにする幼稚園児みたいな理由だったなんて言えないよ。

「おーい？いろはー？心の声ただ漏れだぞー？」

「元気そうだし…部活にも来れるでしょ。昼ごはん食べに行こー」

「あーん、真姫ちゃん、冷たい」

「お腹すいた」

望花がもう食堂へ向かう姿勢をとったので、後の二人も歩いて行ってしまった。

私も無言で食堂へ行った。

放課後。

一つの台でその死闘は繰り広げられていた。

パソコンパソコンパソコン……ノイローゼになりそうな勢いでラリーが続いている。

(一球もミスらずに打ち続ける事)

ラリーの主は汗だくで苦笑いの紗々先輩と真姫だった。

「真姫ちゃん？そろそろ……ミスってくれないかなあ？」

「さ、紗々先輩こそ……どうですか？」

「はあ、真姫も紗々も往生際おつじょうめいが悪いぜ」

美子先輩もあきれて死んだような目でみている。
そしてこう続けた。

「亜矢先輩並の往生際の悪さだぜ……」

でた。亜矢先輩。

本当に誰なのであろう？

頭を整理しても、本当に分かんない。

やっぱりココは訊いておくべきなのだろうか？

そんな事を思っていたら、紗々先輩がミスをした。

「あ……美子お！それ言わないでよー集中力途絶えちゃったでしょ？」

……取り乱して(?!?)る。

やっぱり訊くのは後回しにして置こうかな。

次の日。

三時間目、体育、縄跳び。

「ハア…ハア…ハア…」

「まさかの昨日と同じ展開だな…いろは」

「なわっ、とびって、本当にハッ！難しいー！！！」

「…真姫はもうあやとびしてるし、望花なんてアレなんだろう？三十跳びっばいものしてんだよ？ウチらはまだ前跳びがやっとなのに」

「なわっ、とびっ、ふおっ！」

バダッ！

「早ええええ！？ふおって何！？しかも『なわっとびっ』って何？！」

私は倒れた。

床に広がる色とりどりのラインが見守る中…。

昨日、亜矢先輩の事ずっと考えてて寝れなかった。
今日こそは…！

合格 (後書き)

どうも、天井です！

何故か今回は夢落ちみたいですね (笑) 気分的に。

これが平均的な一日…なんだと思っってください (^^)

話しの展開をもっと広げたいな… (独り言はよそでやれ…)

命名。(前書き)

青春のバカさがゆるりと書かれています。

メロンパンでも食べながらゆるりと読んでください。

命名。

「いい？一年生。見ときなさい」

ひなげし寮、練習所。

茜先輩は練習所にある三台の台の中の二番目の台に着いてこう続けるのだった。

「今から一人千本ノックを開始します！」

「まあ、ノックって言うか多球ね」

利絵先輩が補足する。

茜先輩が言うにはこう言う事らしい。

茜先輩が出す色々なボールを一人確実に千本打ち返すまで寝かせない…らしい。

「まずは…」と茜先輩は目を細めて美子先輩を見た。

「ええ！？美子かよく勘弁してくれ茜！」

「問答無用。さあ、台に着いて構えなさい！」

十五分後。

あの体力勝負だけで生きていそうな美子先輩が倒れた。

「ちょ…タンマ…やっぱりキツイぜえ…」

皆の目が一瞬にして薄目になった。

見てない、何も見てない…と言った感じに。

「さ、お次は…」

茜先輩がニヤリと笑った次の瞬間！

「にゃー…」

にゃー…だと！？

誰だ！猫なんぞ飼っていた奴は！？

つてか猫！？なんでこの寮内に猫が…

「あら、小三郎^{こさんろう}。また来たのね」

茜先輩はそう言って、キャラメル色の小さい猫を抱き上げた。すると、さっきまでぶっ倒れていた美子先輩は元気を一気に取り戻して猫に駆け寄った。

「おー！みーにゃん、来てたのかー！餌、餌…」

話しを整理しよう。

全然分かんなくなった、みーにゃんなの？小三郎なの？まあ、結論から言つと場が和んで多球どころの話題がなくなつてほつと一息だったと言つたところか。

「美子つたら何言ってるの？小三郎よ」

茜先輩はめっちゃめっちゃ和風の名前だし。

「茜こそ違つぜ。みーにゃんだろー？」

美子先輩はありきたりな名前だし。

「二人とも、コイツは利絵二号だったの」

利絵先輩も口をはさんで、ちよつとした取り合いになっている。
こう言う時は、一番頼りになりそうな紗々先輩に訊いてみる事にしよう。

「紗々先輩、この猫なんですか？そして先輩方の取り合いは何ですか？」

「この猫は私達がこの寮に来たと同じ時期に敬像先生が連れてきたの。でも気まぐれでたまにしか寮に姿を見せないのよ？ちよつと三人とも…猫ちゃんは『アルファニア・キャラメル・ストロング』だって名前決まったじゃない？」

ちよ、紗々先輩？

え…紗々先輩のネーミングセンスが一番ビックリなんですけど…。

私が口をポカーンと開けて見ていると、瑠璃が話し掛けて来た。

「なあ、いろは？あの猫どう思うよ？」

「どう思うって…何が？」

「なんかあの猫…どこかで見かけた事なかったか？」

「ん…そう言えばあ…」

心当たりは無いでもなかった。

美術の時間にたまたまこんな感じの猫が入り込んで来て…確か先生がムツゴロウさんみたく可愛がっていた気がする。その時確か名前を言っていた気がする。

「もう！小三郎よ！」

「みーにやんだぜ!？」

「利絵二号だつつつてんじちゃん！」

「アルファニア・キャラメル・ストロングでしょ？」

そんな意味不明な争いを止めたのは真姫だった。

「せ、先輩方！この猫は『リンゴ』ちゃんだった気がします！」

場の時間が止まった。

一瞬だけ皆の動きが硬直し、次の瞬間には元通りの和やかな雰囲気になっていた。

「…そうね。確かそんな名前だったわね」

茜先輩は抱っこしている猫に優しくほほ笑んでそう言った。

「そうだな」「そうよね」など、先輩方も納得しているようだった。

「まず、小三郎には餌を与えといて、私達は多球を続けましょう」

三秒くらいして一年生の三人は真姫を細い目で見た。

お前が解決させなければ多球はストップしたのに…と。

「さあ！次はそうね…いろは！貴女よ！」

「ええ！？私いい！？」

「運動オンチだなんて言い訳は通用しないわ！さ、台に着きなさい！」

さて、さっきの騒動は一体なんだったのだろうか。

本当、なんだったんだろうね？

寮からはいろはの気の抜けた叫び声と猫の鳴き声がこだましていたとか。

命名。(後書き)

どうも、天井です！

そろそろこのほんわかした空気もなんとかしないと…なんて思っ
てはいるのですが、なかなか抜け出せないですね(笑)

今回の猫は私の家の実家で飼っていた猫がモデルです。

私は「リンゴ」って呼んでたんですけど、お父さんがずっと「小三
郎」って呼んでて(^^;)

その出来事は頭から離れません。

今年でリンゴは十三歳…長生きしてもらいたいです。

試験。(前書き)

青春のバカさがゆるくかかれています。

多少、普通の中学校とは違うシステムかと思われます。

スポーツドリンクでも飲んで、ごゆるりと読んでください。

試験。

雨降りの六月上旬。

解らない…何もかも。

XがYとどんな関係にあるかだと？付き合っではいるが、Yが浮気して気まずい関係に一票だな。

ってバカ！数学の問題にそんな人間性が絡んでくる訳ないだろ！

自分の部屋に閉じこもって一人で考えるからいけないのか…？

ここはやっぱり頭のいい奴から知識をさずけてもらうに他ならない。

「ってわけで真姫！タスケテ…」

明日は今期最初のテスト、定期テストである。

中学校の勉強はやたらと難しく、あとやたらとXとYが出てくる。XとYって何の略なんだ…Yはや行の名前の人だと考えてもXってなんだ！？ローマ字でもそんなに使われないよ！文字を小さくするだけならIに任せとけばいいじゃん！

「いろは…それ考えすぎだよ。いろはのノートを見れば一発で何考えてたか解るよ…」

「そんなさあ、XとかYとか言われたって解んないんだよ…。ずっとフォア・バック・ドライブしかやってないんだよ？どっちかって言えばf・b・dだよ！」

「まず数学を考えようよ…」

真姫が苦笑いをしているのはに説いていると、部屋のチャイムが鳴っ

た。

ピンポーン。

「卓球か!！」

瑠璃がドアごしにツッコんでいる。別に卓球部だからと言って流行っているギャグではないのだが。

訪ねて来たのは瑠璃と望花。やっぱり考える事は一緒らしく、真姫に教えてもらおうと言った理由だった。

「ここはコレをかけて…そうするとXが消えて…どう?…どうやって解くんだけど…」

「おお!真姫!先生より解りやすいよ!」

先生に謝ってください。

まあ、そんな感じで真姫の教え方は優しくしかも解りやすい。

真姫先生の授業もおよそ一時間…。

望花以外は飽きて夢の世界へ行きかけていた。

その時、またしても部屋のチャイムが鳴った。

ピンポーン。

「って、卓球じゃない!」

声の主は茜先輩だった。

茜先輩でもこんなくだらないギャグ使うんだな…とか思いつつ、茜先輩の話しを玄関で聞いた。

「明日、テストで全員四百点以上点を取りなさい」

「え…なんでですか？」

「四百点以上取ると、いい事あるわよ？」

「そんな誘拐犯みたいな説明じゃ、誰もついて行きませんよ…」

「…そうね。じゃあ、四百点以上取れなかった人は一週間多球の刑ね」

その言葉には私だけじゃなく、真姫も望花も意識が飛びかけていた瑠璃でさえはっとなった。

「よろしく」と茜先輩は軽く言う可憐に去って行った。バツクでは雷がピカッと光る。

「瑠璃、ここで伸びてちゃ私達全滅ね」

「そうだな、いろは。四百点以上取れないのって私達二人だもんな」

「大丈夫よ二人とも。私がみっちり教えるわ」

「頼みの綱」

四人は必死に、それはもうノートが擦り切れるまで勉強した。

皆が一段落ついた頃、二年生側の部屋から茜先輩の怒号がすごい勢いで聞こえて来た。

「そこは違うでしょお！？なんでそうなるのぉ！解らなければ百回ノートに書きなさい！千回でもいいわ！これは卓球部の危機なのよ

!？」

その部屋にはもう立ち入りたくないと思った瞬間。

しかもその怒号の話しには少し宗教っぽい会話までもが含まれていた。

「さあ、復唱しなさい！リピートアフターミーよ！神よ我が卓球部に栄光あれ！」

もう英語の勉強なのか宗教の押し付けなのかわからない。

しかもそこに紗々先輩、利絵先輩、美子先輩が居合わせて居るならまだしも、これが独り言なのであればとてつもなくアイタタターな人になってしまう。

そう思った一年生の四人組。

もう一冊のノートを取り出すとそのノートも消費するくらい勉強した。

テスト成績発表の日。

テストは思ったよりもスラスラ解けたが凡ミスがあった。

成績発表は部活ごとの平均成績によって順位が決まる。

卓球部、二位。

惜しくも一位は二年生首席が居るソフトボール部に取られてしまった。

でも、卓球部は全員が四百三十点以上だったためか、茜先輩は上機嫌だった。

上機嫌だった理由はそれだけではなく、この学校では定期テスト三

位までに入賞した部活には部費がアップされるという約束がされている。

茜先輩はそれを狙っていたのであろう。

「皆、よくやったわ！さすが私が見込んだ部員達だけはあるわね！」

最終的には上機嫌だった茜先輩以外、全員三日間も寝っぱなしだった。

頭がヒートアップして部活どころではないためである。

その後、「次は一位を狙うわよ！」とか茜先輩が言い出して、自力での宗教のような怒号を録音したテープを卓球部全員に配ったのは言うまでも無い。

試験。(後書き)

どうも、天井です！

今回はその後の茜と部員の様子を…。

茜はソフトボール部部长で二年生首席の子に頭が良くなる秘訣を聞き、あのテープを作った。

もちろん、首席の子が宗教のような怒号をしているはずもなく、みんなに手取り足取り勉強を教えていた事に気付くのは数カ月後のテストの時の話しなのだが。

その後の卓球部。

一時的に頭が良くなったものの、体調をくずしてしまっただけは元も子もない。

おかげで三日間練習は出来ず、体は鈍って頭は真っ白になり部員にとってははた迷惑な話しとして語り継がれた。

会議。(前書き)

青春のバカさがゆるく書かれています。

作者は元ヤンではありません。どちらかと言つと暴走派でした。

(同じだ！)

みかんでも食べながらゆるりと読んでください。

会議。

ひなげし寮ミーティング室。

そこには部員全員が集まっている…と云うか集められた。部長…^{もと}基、茜先輩は、皆が揃ったのを確認すると重々しく話しを切り出した。

「まだ新入生には早いと思いつてなかったと言いつて早二ヶ月、二週間前にせまってしまった今日、部長の責任として言つわ。中学生卓球大会地区予選が市営体育館で開かれる！」

そう宣言した直後に利絵先輩はホワイトボードに「中学生卓球大会地区予選」と書いた。キュッキュと言う音が室内に響き渡る。そして茜先輩は書き終えたばかりの文字の下をバンッと叩いてこう叫んだ。

「今日の議題はTシャツに入れる文字について！」

そう言うと茜先輩はパイプイスに足を組んでふんぞり返って座り、利絵先輩に話しを振った。

「毎年我が卓球部ではユニフォーム以外にもう一つ練習用のTシャツを作るの」

そこまで言い終えて利絵先輩は紗々先輩に目で合図した。紗々先輩は皆に真っ黒で何も書かれていないTシャツを配った。

「それに入れる文字を考えろつて。茜が言つには」

「やっぱり、昨年同様『絆』でいいんじゃないか？」

美子先輩がそう言うつと茜先輩は目をつぶって冷静にこう言った。

「発言権を求めてから発言しなさい。なるべくスムーズに話し合いを進めるためにもね」

美子先輩は不愉快な顔をしてぷーっと膨れた。

それを可哀想に思ったのか、利絵先輩はホワイトボードに小さく『絆』と書いてあげた。

三分くらい沈黙が続いただろうか。紗々先輩が手を挙げた。

「はい。私は今年……」

すると、茜先輩は話しを止めた。

「待った！紗々、貴女は完璧よ。今すぐお嫁さんに行っても問題ないくらいの女の子だけど、そのリバウンドか何か…ネーミングセンスが壊滅的なのよ…今回の議題には参加しないで。雑用係を命じるわ……」

紗々先輩は美子先輩の隣に行くと二人でぷーっと膨れだした。

「はいはい、先輩ー」

瑠璃がケータイをいじりながらやる気なく手を挙げてこう言った。

「この言葉良くないですかー？」
天上天下 唯我独尊『……』

「どこの不良集団よ!？」

茜先輩からすかさずツツコミが入った。

「えー?かつこ良くないですか?」

「瑠璃のセンスじゃカッコいいかもしれないけど、南ヶ丘咲中はヤンキーの集団か暴走族だと思われるわ」

「だって今掲示板でそう言う話しになって…あ、赤テープ貼っとくのも手ですね」

「なんでそんな話しになってるのよ!どんな掲示板に足踏み入れてるの!？」

「今時古いですけど、赤テープとか貼つといた方が他の中学になめられなくて済みますって」

「赤テープって『喧嘩買います』って事じゃない!どっちかって言えば白テープ『喧嘩売ります』の方が私は好きよ!」

「でもスクバ(スクールバック)やエナメルに白テープって色的に合わくないですか?」

すると真姫が軌道修整に入った。

「二人とも!今はヤンキー談義してる場合じゃないですって!」

「じゃあ…」と言っていきなり茜先輩は真姫の方を向いた。

「真姫はどう思ってるの？」

「え？……うーん……昨年同様に「文字とか……」

「却下。昨年と同じなんて認めない」

「う……同じ文字って言ってないのに……」

真姫は先輩に言いくるめられて浮かない顔で座った。

その茜先輩の矛先は何故か望花に向き……。

「望花、貴女ならいつぱい言葉知ってるわよね？何か良い言葉ない？」

「無我の境地」

「それどっちかって言うとテニスじゃない！卓球はそんな一球一球が死闘を繰り広げるみたいに迫力の問題じゃないのよ！頭脳プレイよ、頭脳プレイ！」

そして鋭く尖った矛先は私の方で止まった。

「いろはー、貴女は何かないの？」

「え！？……長いですよ？」

「いいわよ、言ってみなさい？」

私は皆が討論と言う名の漫才をしている間も真剣に考えていたのだ。恥ずかしくてあまり言いたくないが…でも言わなくて役に立てないよりはまし!と思い言った。

「やる気の種を植えたなら、汗と涙の水をやり、仲間という太陽を一身に受け、やがて勝利の花が咲く…なーんて!」

「長い」

めちやくちゃバツサリ切られてしまった。

あの長い文章をたったの三文字で…。

美子先輩や紗々先輩達と一緒にぷーっと膨れようかとも思ったが、次の瞬間。

「でも、一番まともだし、ロマンチックだし、いいんじゃない? それにしましょう」

茜先輩が納得しましたの表情を見せたので、皆も「そうだね」「それがいいよー」などと静かに歓声を上げた。すると利絵先輩がこう尋ねて来た。

「いろは、名言に水を差すようで悪いんだけど…なんて言ったか覚えてる?」

「へ!?!いや…明確には…」

ここから思い出すのに会議の二倍の時間がかかったと言う。

会議。(後書き)

どうも、天井です！

最近うどんばかり食べている今日この頃…。
そろそろしゃぶしゃぶとか食べたいです。

なんか、卓球の話なのに最近コイツら部活してねーな…って思いました。作者自身も。

でも、コイツらはちゃんと部活してるんです！

部活があつて 自主練習もして 勉強もして おふざけもしてる。
って流れなんで(笑)

練習 (前書き)

青春のバカさがゆるく書かれています。

たまには良い物を口にしたいです。

りんごおいしいです (笑) ごゆるりと読んでください。

練習。

そう。

今までぐーたら過ごしていた訳ではないが、これが本来の部活をする姿であろう。

大会も二週間前、細かく言えばTシャツ会議が大会宣言だったために、大会まで十五日間しか練習期間がないのだ。

そんなある日。

すごいまれな確率で何故か先生が部活に姿を現した。

すると生徒会をやつと終えて部活に専念しよう…と疲れた茜先輩が遅れてやって来た。

それを先生が見逃さず、茜先輩を呼びつけた。

「西音寺茜！お前何遅れてのこのこ来てんだよ？」

「生徒会で遅れてしまいました」

しばしの沈黙。

すると先生はやはりふに落ちないと言ったように言いつけた。

「お前、謝りも無しか」

「すみません」

茜先輩はめんどくさいと言ったようにクールに謝った。

「…そうか。そんな態度か、部長ともあるうものが」

「お言葉ですが。先生はお忙しいと言いましたよね？ですが先生はこの前音楽教師の優菓先生とお茶飲みながら談笑していましたよね？私見たんですよ」

まさかの家政婦が見ていた瞬間である。

その言葉に部員全員から白い目を向けられた敬像先生はゴホンと咳払いをして茜先輩にこう言った。

「お前確か…逆立ち出来なかったよな？やってみるよ」

最低である。

大人気ない、本当に大人気ない人だ。

人の苦手をほじくり返すとは…。

だが茜先輩は床に手を付くとキレイな逆立ちを見せた。

先生は「ア…アレエ？」と首をかしげて言った。

「逆立ち苦手だって…お前じゃなかったか…」

「あ、ソレ私ですけど？」

利絵先輩はめっちゃ仏頂面でそう言った。

そこから何故か部員全員の逆立ちテストが始まり、やっと本題に入った。

ちなみに、利絵先輩と私以外の部員全員逆立ちができた。

敬像先生はつまらないといった表情をして大きな茶色の封筒を取り出すと、中から手紙らしき物を出し、「これは美子で…これが瑠璃で…」などと一人一人にそれを配っていった。

私が渡された紙にはこう書かれていた。

「基礎を完璧にする事、スマッシュを十球中全部決められるようにする事」

練習メニューのようだ。

皆の練習メニューは解らないが…自分は十五日間コレを練習しなければいけないのだ。

メニューを与えられた事がちょっと嬉しくて、少しやってみたがスマッシュは十球中一球しか入らなかった。

練習に付き合ってくれた利絵先輩も

「伸びる要素ナシね。はあ…先生の試験のアレはまぐれだったの？」

と毒舌であきれていた。

はつきり言ってる時は死ぬ気だったんで…頭から炎とかでまませんでした？

以外と死ぬ気一步手前の状態で練習してるとお腹がすくもんでしていつもは一年生二年生別々で食べるものの、茜先輩の提案で今日は食堂で夜ご飯を部員全員で食べようと言う事になった。

メニューは全員そろって「みなぎるカレー」とか言うカレー。

楽しく全員で談笑していたが、突然望花が「う…」と汗をかいていた。

「どっしたの？望花」

「人参…」

「嫌いななの？」

無言でコクリとうなずくシヨートヘア…可愛い。
すると瑠璃が笑ってこう言った。

「あははー、だめなんだあ。食べてやるよ」

「恩にきる」

望花つてどこでそんな言葉を覚えてくるのだろうか…？

瑠璃が望花のお皿からキレイに人参を取り除いていたのだが、それと同時に瑠璃のお皿からはたまねぎがキレイに無くなっていた。

「ちよーつと…瑠璃？」

こめかみに怒りマークを静かに浮かべている真姫。

「あ？何さ、真姫」

「自分で食べなよ…あむ…」

そう言いながらもそのたまねぎを食べてあげる真姫は本当、優しいな。

「ちよつと美子？！何してんの…」

そこにはキノコを茜先輩のお皿に移してる美子先輩が居た。

「ええー…だって食べれないんだじえ〜…」

「後輩の前で恥ずかしい…示しがつかないわね」

皆が失笑すると「あら？」と紗々先輩がお皿を覗き込んだ。

「どうしてかしら…お肉が無い…？」

「肉喰わんと大きくなれないぜーはむはむ」

犯人確定の瞬間である。

それと、小柄な美子先輩が言っても全然説得力がないのだが。

まあ、そんなこんなで野菜が食べれない卓球部メンバーは果たして強くなれるのだろうか？

と言っか！お荷物にならないように私が一番頑張らなきゃなんだ…。

練習。(後書き)

どうも、天井です！

なんとか「大会」と言うスポーツシーンがいかにも出てきそうな発言がやっと！やっとできました！

上手く書けるかは自信がありませんが…精一杯がんばりたいです！
つて…この台詞どこかで言った気が？

最近良い物を口にしていません。

正直言つて、焼肉とか食べたいです。

あと、何故かそうめんも食べたいです。

【地区予選編】大会。（前書き）

青春のバカさがゆるく書かれています。

今回だけ真剣（！？）です。

たまにはケーキとか食べながらゆるりと読んでください。

【地区予選編】大会。

各々練習を重ねた約二週間…。
それを試す日がやって来たのだ。

中学生卓球大会地区予選が…。

大会初めての私達一年生メンバー、いや、真姫は初めてじゃないけど…。まあ少なくとも私は緊張して頭が真っ白である。ヘルプミー！会場到着してから十分後に、さまざまな色のジャージを着た中学校が集まってきた。

時間は朝の七時半。

「南ヶ丘咲中」と張り紙がしてある荷物置き場に全員荷物を置くと、茜先輩から指示が出た。

「二年は練習台を確保してて。一年生は真姫以外ここに残って私の説明を聞きなさい。真姫は大会経験者だから二年と一緒に練習していいわ」

「はいっ」「はい」「わかったぜー」「あいよ」

と返事をすると、四人は行ってしまった。

すでに何が起きているか、緊張で何もわからない。

大会では会場に入ってすぐに自分達が練習する台を確保して練習するらしい。

他の学校から「入れて下さい」と言われたら、ちゃんとマナーを守って入れてあげる事もしなければならぬそうだ。「嫌です」って言ったらどうなるんだろう？

「でー…その後の流れは？開会式とか、かつたるいんですか？」

瑠璃はいかにも不機嫌ですアピールをしつつ、茜先輩に訊いた。

「まず開会式、午前中は団体戦があつて、午後から個人戦。試合の進行状況にもよるけど、だいたい午後の六時には閉会式の予定ね」

し…式！？なんか堅苦しいのかなあ！？

ししし…しんこ…じよきよ…？

緊張と理解できない言葉の羅列でもうよくわからない。

「式って言うか…宣誓とか、前大会で優勝したところから優勝カップ返還とかね。運動会思い出せばいいのよ。進行状況って言うのは、卓球台の台数が限られてるでしょ？それにどんどん試合を入れて早く終わりたいけど、試合が二セット対二セット…つまりフルセットとかになってしまふ試合が多くなると終わるのが遅くなっちゃうって事。いろは、分かった？」

茜先輩は優しく教えてくれた。

長文台詞ご苦労様です！！

台の台数が限られている…とは言われたものの、いつも練習している台数に比べればその何倍であるうか。

なんせ、体育館一面が藍色の卓球台で埋め尽くされているのだからきつと進行状況なんて目じゃないんだらうな…。

団体戦のルール、個人戦のルールを先輩からしつかり聞いてから皆が居る台で練習を始めた。

試合は団体戦、個人戦共にトーナメント方式らしい。

すごい緊張してたったの三球しか続かなかつたりして…いつもの自分の半分以下の力しか出せない。

辺りを見渡せばドライブとカットを見事にやってのける人や、ラリーを何回も続けて余裕の笑顔を見せている人が居て、それが余計に緊張を高めたり。

でもなんだかあの会議で作ったTシャツが一体感を高めているような…そんな気がする。

それに、あんなに死に物狂いで練習したんだからきつと大丈夫…。

午前八時半。

全学校がステージの前に綺麗に整列すると開会式が始まった。

前体会個人戦優勝の男子、女子共に宣誓をして、優勝カップと優勝旗を返還。

他の学校も自分達も体育座りでじーっとステージ上を睨みつけている。

確か「杉卷大付属中」すぎまきだいふぞくちゅうって言葉がたくさん聞こえたような…。

「これで開会式を閉じます」

と偉い感じのスーツ姿のおじいさんが一言言った瞬間、全中学校が起立して「よろしくお願いします！」と勢い良く言った。

正直かなりびっくりしたが、ここで怯んではお荷物になるだけ！と自分に言い聞かせて「お願いします！」と震えた声で言った。武者震いだよ、武者震い。

開会式が終わるといつの間にか来ていた敬像先生に召集をかけられた。

団体戦のトーナメントが決まったらしい。

「なんとか杉巻大付属の奴らとは一回戦で当たらないみたいだな」
やっぱり杉巻大付属中はキーポイントの強い中学校のようだ。

「えー？でもアイツらは勝ち進むだろうからえーと……げっ！準決
勝で当たるぜ？」

美子先輩が血相を変えてそう言った。

「ふむふむ……一回戦は東山中か。まあ、去年も一回戦敗退の中学校
だし余裕でしょ」

利絵先輩はトーナメント表とにらめっこしていた。

「んーと……一回戦は公仙こうせん皆中とかあ。勝算は半々ってとこね」

あの優しい紗々先輩でさえ厳しい顔で悩んで居る。

茜先輩と真姫は柔軟体操をしながら話しをしていた。

「真姫、何か注意する選手とか居る？注目の選手でもいいわ」

茜先輩は真姫に情報の提供を求めている。

「そうですね……選手という事ではなく、恐れている事態なんです
……その……昨年の県大会九位と七位が居るんです。九位には八位の座
を汚されないようにしたいですし、七位には勝ちたいですし……」

いつもの真姫じゃなくて、何かが違う真姫がそこに居た。

「めんどくさー、部活なめてかかるんじゃないかった」

「…イメトレ」

瑠璃も望花もそんな事を言っているわりには、いつもと違う鋭い目つきをしていた。

そっだ、皆真剣なんだ。

最後の大会と言う訳ではないが、二年生は来年この大会には出れない訳だし、他の学校だって私達と同じで緊張したり作戦を立てたりしてるんだ。

「中学女子団体戦、南ヶ丘咲中と東山中は第四コートに集合してください」

ステージ上の「本部」と呼ばれるところからマイクで男の人が放送を入れた。

「…さい」「…い」とぞわめく会場にマイクのエコーが響き渡る。

私達の戦いが始まった。

【地区予選編】大会。（後書き）

どうも、天井です。

やっと地区予選編突入です！やったー！！

あれだけスポーツシーンと語って（！？）いただけあって嬉しいです、そして緊張します〜…。

負けるな天井！プレッシャーなんて…！！

かっこつけて【】なんかつけました。

決して今のはダジャレなんかじゃないですよ？

長文すみません。

これからもっともっと頑張りたいです！よろしくおねがいします！

【地区予選編】団体（前書き）

青春のバカさがゆるく書かれています。

寒い季節がやってきましたね！

あたたかいものでも食べながらゆるりと読んでください。

【地区予選編】団体

団体戦はトーナメント戦である。

あのメジャーな頂点が一つだとしらしめてくれる表で有名なトーナメント戦。

一試合目はシングルス、二試合目はダブルス、後は決着がつくまでずっとシングルスと言うのが団体戦のルールの一つである。ちなみに三試合勝つと勝利となる。

一回戦は東山中、二回戦はシードの公仙皆中、そして勝ち進めば杉巻大付属付属中、その後は試合の結果により決勝の相手が決まる。

一回戦の東山中には三対〇で私達の勝ち。
詳しく言うと美子先輩、紗々先輩と利絵先輩のダブルス、真姫が出てストレート勝ちだった。

二回戦、シードの公仙皆中との試合が始まった。

一試合目、西音寺茜vs麻木ソラ（あさき そら）って言う人。一試合目からなんとも白熱しそうな予感である。なんせ、シードの中学だからだ。

「お願いします…」

「おねがいします！」

麻木さんが控えめに挨拶したのを裏返すかのように茜先輩はめっちゃ笑顔で挨拶した。

相手のラケットは私と同じタイプっぽい。

一セット目、茜先輩のサーブを相手は何の動きの特徴もなく返した。

「なんだ、ツツツキ……!？」

「西音寺…私のツツツキを甘く見てもらっては困る」

「だんだん回転が強く…!」

「これじゃ、得意の頭脳戦の前に手首が曲がっちゃうんじゃない？」

「く…回転が…キツイ!!」

茜先輩はそのボールを取る事ができなかった。

その次も、その次も失点。

一セット目は結局十一対二で茜先輩の負けだった。

ちよ、え？

「先輩!? コレヤバインじゃないですか!？」

茜先輩は何も答えてくれず、スポーツドリンクを黙って飲むだけだった。

「相手、相当下回転の ツツツキを練習してるわね…」

利絵先輩はそう呟いた。

(ツツツキとはボールの下を擦る事によってボールに下回転を与える打法の事)

「え…でも茜先輩だってツツキができないわけじゃ…」

そう心配しているうちに茜先輩は台についてしまった。

「見切ったわ…公仙皆中」

すると茜先輩はさっきからは想像できないほどバシバシドライブを打ちまくっていた。

「え…急に強く!?!うわっ…!!」

相手は返す事もできず、焦っていた。

「え!?!なんで急に強くなってるの!?!」

私がびつくりしていると利絵先輩が教えてくれた。

「いろは、茜のラバーは?」

「え? 黒のツブ高…そっか!」

「そう。ツブ高は回転を裏返しにすることが出来る…。下回転のボールをツブ高で返すと逆の上回転がかかって相手に返る、相手は下回転だと思ってそれをツツクとそのボールが上がって茜にとってチャンスボールとなる…って訳」

なぜか一年生全員が「おおー」と納得して拍手が巻き起こった。

利絵先輩は「まあまあ」と誇らしげになだめた。

茜先輩はその後バシバシドライブを打ちまくって、セット数三対

一で勝利した。

茜先輩は最初と同じ笑顔（黒い笑顔）で挨拶をして戻ってきた。

「なんで最初、ツブ高を使わなかったんですか？そしたら一発でかたついたんじゃない？」

真姫は茜先輩に訊いた。

「セツト目は相手の様子を見るためにわざとあげるのよ」

「かっけえ！」

「何でか知らないけど、すごいカッコつけてる……」

「それに……相手のツツキは鋭かったし……公仙皆中も練習はちゃんとしてるのね」

茜先輩は静かに呟いた。

【地区予選編】団体（後書き）

どうも、天井です！

よくアニメとかを見ていると、その話しにあった内容を問題にしていたりしますよね。と言う事で…

問題。

今回、西音寺茜と対戦した対戦相手の名前は何？

制限時間は十五秒…！

答え！

麻木ソラ

たぶん誰も解らなかつたと思います…はい。
それでは…また。

【地区予選編】 応援。 (前書き)

青春のバカさがゆるくかかれています。

大会でこんなことはありえませんが(笑)

紅茶でも飲みながらゆるりと読んでください。

【地区予選編】応援

一試合目、シングルスは無事に勝った。
そして二試合目はダブルス。ここを勝てば一気に有利となる。
ダブルスは紗々先輩と利絵先輩である。

「この二人って接点あるようにみえないよなー」

瑠璃がそう呟いていたが無理もない。

この二人、普通に友達というところで接点はありありなのだが、ダブルスの練習をしているところを誰も見ていないのだ。
秘密で練習とかしているのだろうか…。

ともあれ相手は亀野^{かめの}ミツル、紺野^{こんの}ヒカリって言う人らしい。
真姫の情報によると、昨年の大会でもいいとこまで行っているんだとか。

「お願いします」

四人が交互に握手を交わし、台に着いた。

四人で台を囲んでいると台を狭く見せるものだ。

そののん気に思っていると、いきなり公仙^{こうせん}皆中のギャラ^{がいちゅう}リーの皆様
がバカデカイ声で応援を始めた。

「ファイター！公仙皆！ファイター！」

体育館一面に応援が響き渡る。

正直言ってすごいうるさい…。

南ヶ丘^{みなみがおかしちゅう}咲中の私達は全員耳をふさいでいたが、ダブルスの二人はそんな事なんてできるわけがない。

試合に集中できないまま、一セット目は落としてしまった。先輩に、一応感想を聞いてみる事にする。

「あの…大丈夫ですか？先輩？」

紗々先輩は

「頭が痛いわあ…」

と目を回していて、利絵先輩は

「ジェラシツ パーク観てるみたい」

と意味不明なコメントをくれた。

伏字の意味はあったのだろうか？

二セット目。

応援もだんだん白熱してきたらしく、「ミツルがんば！行け行けヒカリ！」などと言う応援が聞こえてきた。

亀野さんも紺野さんも満足げな表情をしていた。

紗々先輩と利絵先輩は眉間にシワをよせていた。

そして二人の我慢と鼓膜は限界にまで達したらしくこう叫んだ。

「頑張れ紗々！ファイト利絵！」

その言葉に会場全体が静まり返った。

それとは裏腹に二人はギンと白目を向いて怒涛の攻撃を繰り広げていた。

そんなこんなで、セット数三対一。

茜先輩と同じ展開で勝利した。

試合を終えた二人はヒートアップしすぎたらしく、陣地に来るやいなや、パタリと倒れてしまった。

二人は

「ひどいジェラシッ パークだった…」

とコメントしていた。

【地区予選編】応援。（後書き）

どうも、天井です！

応援って以外と喉が痛くなりますよね、私も青春時代は運動会・体育祭などで「応援団」しました。懐かしいです…。

小学五年生の時にそれで酸欠になって保健室に運ばれた事があります、はい。

でも、応援をすると気持ちがかッとすると言いますか…なんか、「自分かっこよくね？」という気分になります（笑）

それで応援してくれた人やグループが勝った時はすごく嬉しいです
よね^^

【地区予選編】能力（前書き）

青春のバカさがゆるく書かれています。

試合中にジュースをオーダーしたら審判に怒られると思うので絶対にしなくてください。

でも、ジュースを飲みながら楽しくご覧下さい。

【地区予選編】能力。

なんと、あと一戦勝てば準決勝進出となった南ヶ丘咲中卓球部メン
バー。

今回は真姫のシングルスである。
試合前の真姫は

「今回の相手は九位の人」

とニヤニヤしつつ答えてくれた。

余程、勝つ自信があるらしい。

いや・・・なんかめっちゃ楽しそう・・・。

その九位の人物、名前は露草つゆくさナツキ。

戦型はカット。

二人はラケットを交換した。露草さんは不機嫌そうにラケットを睨
みつけ、真姫は笑顔でラケットを眺めていた。

「負けない・・・高緒真姫・・・」

「ん？何か言った？」

つぶやきを真姫が見事に聞いていたため、「はうつ・・・！！」と
原始的な驚きを露草さんがして間もなく、ゲーム開始となった。
今時「はうつ・・・！！」なんて驚き方する人居たんだ・・・。

真姫はずっと笑顔だった。

黒い笑みと言いつか……。

それを浮かべてバシバシドライブを打っているのだ。正直怖ええ……。

だが、それと打倒なくらいにカットで相手も拾っている。

「わあ……カット上手い……紗々先輩とやったらどっちが上手いんだろう？」

「わ、私の方が上手いですわよー!!」

紗々先輩が間髪を入れずしゃべって、焦ってお嬢様キャラになっていた。聞いていたが気にしない。

「そ、それにしても真姫はすごいループドライブね……いろはとやったらどっちが上手いんだろう？」

紗々先輩が痛い反撃をしてきた。はつきり言って真姫に勝てる訳がないが、さつき自分から攻撃を仕掛けてしまった手前、今更負け腰になる訳には行かない。

「私はスマツシュ専門ですから!……それにループドライブなんて山なりに軌道を描くから回転がキツくなる前に上回転でつぶしちやえばいいんですよー!!」

自分もお嬢様になったが、気にしない方向で行く。

「あら?いろはも言うようになったのね。確かにいろはの思考回路だったらその答えだけでも……相手はカットマンよ?回転について行けなくてなんか……可哀想」

そんな会話をしているうちに、一セット目が真姫にあっさり取られてしまっていた。

真姫は「ああ！楽しかった」と言っただけ汗を拭いた。

後から聞いたのだが……。

真姫と露草さんは小学校四年生から三年間もベストエイト争いを繰り広げていたそうだ。

そして、小学生時代のベストエイト争いもこんな感じで真姫が圧倒的だったらしい。

いつもの物静かで控えめな真姫は卓球の事になると人が変わったように性格が勝負師モードになる。

それは小学生時代から培われた物らしい。

「今度こそは……絶対……!!！」

露草さんは小さく拳を握ると台に向かって歩いてきた。

「ナツキ、緊張せずにいつものナツキでかかってきて……。ま！^{エイト}八位の座は渡さないけどね あ、あとお……。私が勝ったらジューズお願い」

「は……。は？何勝手な事……。真姫……」

また真姫のループドライブが決まった。

すると、その次のループドライブはあっさり取られ、また次も、またまた次も。

……。相手が回転に慣れてきている？

真姫も相手の回転の慣れに気付いたらしく、笑顔を止めた。
そして、何かをつぶやいた。

次の瞬間、強烈な回転のループドライブを放った。

チャンスボールに近い山なりの軌道を描いたものの、台についた瞬間に左にボールが吹っ飛んだのだ。

そんな回転のキツイボールを鋭い表情で打ちつづけて三セットを真姫は取った。

そしてまた、真姫はつぶやいた。

「・・・たし・・・気を・・・かな？」

【地区予選編】能力（後書き）

どうも、天井です！

私の家にはファックス機能付きの電話があります。

それでこの間友人とその電話で話す機会があつたので「この際だから・・・」と色々電話の機能をフル活動してみました！

スピーカーはなんだか面白いです、はい。でも声が小さくなってよく聞こえないと言われました・・・。

電話様・・・フル活動させてすみませんでした！

【地区予選編】交差。(前書き)

青春のバカさがゆるく書かれております。

たまには背筋を伸ばして、ちゃんと瞬きをして、じっくりとご覧下さい。

【地区予選編】交差。

「・・・私・・・気を・・・ないかな？」

真姫は不安そうにつぶやいたが、団体戦二回戦シードの公仙皆中「こうせいかいぢゅうにゲーム数三対〇で勝利したのだ！

「や・・・やったあ！！！」

私達はタオルを投げ出して喜んだ。

ただ、間違つてスポーツドリンクを投げってしまった美子先輩だけは「うおい！！！」と叫んでいたが。

皆、満面の笑みだった。

「・・・また負けた」

露草さんがしょんぼりして真姫と握手した。

真姫はやわらかい笑顔でしっかり握手した。

それを見届けた茜先輩が「集合！」と鋭く言うと、団体戦メンバーはさっと台の前に集合した。

「ありがとうございます！」

公仙皆のメンバーは悔しそうに泣いていた。

余程勝ちたかつたのであろう、かなり練習を積んでいるように見える・・・って茜先輩も言っていたし。

可哀想だと同情する気もあるがその分、勝って嬉しい気もあるのは薄情な奴なのだろうか？

「たあ!!！」

「ラッキー! さあ一本!」

隣の台ではなんと杉巻大付属中すぎまきだいいふぞくちゅうが他の中学校と試合していた。

そう、私達は進む。

次の試合へと、進むのだ。

体育館の廊下。

真姫が一人で人ひと気の無い冷たい廊下を歩いていた。

忘れ物が届いたらしい、誰が何を届けたのかはまだ分からないが。

「はっはっはっ・・・ま・・・き・・・」

後ろから誰かが走ってきた。

「た、高尾真姫!!! はあ・・・」

露草ナツキだ。

真姫が首をかしげるとナツキはジュースを差し出した。

「負けたし・・・理不尽だけど約束したし・・・」

「あ、ありがとう」

不意を突かれたような顔の真姫にナツキは笑顔でこう言った。

「次、頑張つて！じゃないと八位エイトの座なんかアタシがばばっと取っちゃうんだから」

「言ったわね！絶対渡さない・・・いや、ナツキには八位って重すぎるんじゃない？」

「な！？また子ども扱いしないでよ！」

すると、くるつと後ろを向いて真姫は歩きだした。

「ちょ、真姫！？・・・頑張れ」

それに真姫は手をひらりと振って答えた。

忘れ物を取りに行くと、そこには以外な人物が居た。いろはが見たらびっくりするような人物が・・・。

その人物は真姫に柔らかく話し掛けて来た。

「こんにちは、高緒…真姫ちゃんですわね？」

「は、はい…」

「生徒会室に忘れ物があったものですから、試合観戦ついでに届けちゃいましたわ」

その人物は笑顔で真姫にメガネを渡した。

「ありがとうございます…」

「ユニフォームが変わってないものですから、すぐ分かったやいましたことですよー」

その人物は口に手を当ててクスリと笑ってこう続けた。

「　　と。南ヶ丘^{みなみがおかざき}咲中の試合結果はどうですか？」

「え、と、今のところは東山中^{あずまやまちゅう}とシードの公仙^{こうせん}皆中に勝ってですね、次は杉卷大付属^{すぎまきだいいふぞく}付属中との団体戦です」

すると、その人物は苦笑いして

「ふーん、そうですね。では、ゆるく試合観戦させていただきますわー…」

と言って自販機の方へ歩いて行った。

やっと開放された…と真姫が思っていると「お待ちなさい！」と声がかかった。

そして

「『橘いろは』は団体戦に出場してませんか？」

と真剣に質問してきた。

「は…はい。いろはは個人戦出場ですが…」

真姫が控えめに答えると、その人物はクスツと笑って

「そう、楽しみにしておきますわっ！」

と嬉しそうに言った。

真姫はその人物が遠くへ行くのを首を傾げつつ見送った後、皆の所へ戻った。

【地区予選編】交差。(後書き)

どうも、天井です！

眠気を飛ばすにはコーヒーとか言いますが、カフェインが何たらか
んたら言われてもピンときません。

でも、コーヒーを飲むと気分的には眠くなりません！

偉大なり…！コーヒー！。

【地区予選編】緊張。（前書き）

青春のバカさがゆるく書かれております。

たまにはストレートティとか大人な雰囲気飲み物でも飲みましよう。

ごゆるりと、お楽しみください。

【地区予選編】緊張。

次は杉巻大付属中との試合。

すぎままだいふぞくちゅう

皆は緊張している様だった。

二回戦まで「ま、なんとかなる」とか何とか言って姿を現さなかった先生でさえもパイプイスに座って監督面かんとくづらをしていたのだ。

団体戦メンバーは全員卓球台の前に整列した。

向えには杉巻大付属中の団体戦メンバーが手首や足首をぶらぶらしていたり、首をコキコキ回している人もいた。

なんか強そう、雰囲気的に。

少なからずこの試合を観戦している南ヶ丘咲中側の人間はそう思った事であろう。

「お願いします！」

二つの中学校がお互いにお辞儀をして陣地へ戻った。

初戦は美子先輩のシングルスだが、美子先輩の顔は強張っていた。

「美子先輩、顔色悪くないですか？」

「へっ！？ああ！いろは、な、な、何言っただよ！全然大丈夫だぜー！」

全然大丈夫じゃなさそうだった。

そして何故か紗々先輩も俯いていた。
そしてそして海山敬像先生、彼も何かを悟っていた。

相手は新崎にいさきコヨミと言う人。

小柄で可愛らしくてショートのコげ茶色の髪：まるで髪を結い上げていない美子先輩のような人だった。

二人は練習球を三球したが、すべて美子先輩がミスしていた。
しかも、先輩の目の焦点は定まっていなかった。

だが、相手のコヨミさんは美子先輩の逆で冷静にかつ集中して打ち込んでいた。

試合はコヨミさんのサーブで始まった。

今まで受けた事もないような鋭いサーブに私、そして一年生初心者組は目を奪われた。

これがあの杉巻大付属中の力なのだ、と。

美子先輩は小柄なのを生かしてひょいっとサーブを取ったが、すぐに打たれてしまった。

次も、また次も。

面白いように相手に点が入って行く。こちらからしてみれば面白くないのだが…。

一セット目の結果は三対十一で杉巻の圧倒的勝利であった。

美子先輩は完全に凹んだ顔で帰ってきて、パイプイスに座るやいなや溜息をついた。

「美子先輩……」

なぜか私はそう呟いていた。

すると真姫はアップをしながら茜先輩に質問をしていた。

「茜先輩」

「ん、何？真姫」

「美子先輩って何かあったんですか？今日、絶対本調子じゃないですよね？」

「……………そうね。紗々なら何か知ってるかもね」

茜先輩は紗々先輩に聞こえるようなトーンでそう言った。数秒の沈黙の後、紗々先輩は俯きながら重い口を開いた。

「実はね……試合が終わった後、美子と一緒に……トレーニングがてらにね、廊下を歩いてたのよ……」

そしたら……

【地区予選編】緊張。（後書き）

どうも〜天井です！

最近はビターやストレートなど…大人な雰囲気にはまっている天井です、はい。

でもビターは苦いので『気分だけ』大人の余韻にひたっております
^^;

やっぱり砂糖やミルクだって捨てがたいです…と言っか必要です（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3392i/>

勝利ノ花ガ咲ク ~ピンポン~

2010年10月14日19時09分発行